



300 例で学ぶ 読影レポートの流儀 MRI, CT, X線, PETまで完全理解



編：齋田幸久
(聖路加国際病院放射線科)

発行：Gakken

2022 年 12 月刊行
A5 判・384 ページ
定価：5,940 円 (10%税込)

“読影レポート”作成の神髄を学ぶ

専ら画像診断を生業とする放射線科医にとって、“読影レポート”は依頼医を介して患者・医療・社会に貢献するための最も重要な手段であり、その精度と信頼性を高めるために日夜多くの努力が払われています。

本書は、臨床で遭遇する頻度が高い309例(MRI：134, CT：116, X線：45, PET：14)を対象とした、画像診断のエキスパート86名の“読影レポート”記載の流儀(心がけ)をまとめたテキストです。各ページは症例ごとのタイトル、キー画像、臨床情報、画像所見と診断を含む読影レポート記載例、レポート作成のポイント、最終診断(病名)・(病態)とその一般的特徴から構成され、脚注の形でエキスパートの流儀(心がけ)が格言風に示されています。

放射線科研修医・専攻医・若手専門医には、多少

時間がかかっても309症例に1症例ずつじっくり取り組んで読み進めることをお勧めします。また、一定以上の経験を積んだ診断専門医は、ご自分の専門とする分野あるいは反対に苦手とする分野の症例を、執筆したエキスパートの顔を思い浮かべながら吟味されれば、またとないリフレッシュになるはずです。そして画像診断の経験の多寡を問わず、すべての読者に、本書の第1章 総説と第6章 コラムを熟読されることを強くお勧めします。そこには、東西を代表するエキスパートである森 壱先生(自治医科大学)、小山 貴先生(倉敷中央病院)と編著者である齋田幸久先生の、画像診断と読影レポートに対する篤く、なおかつプラクティカルな信念が込められているからです。

齋田幸久先生は、聖路加国際病院、筑波大学、そして母校である東京医科歯科大学で画像診断のエキスパートとして活躍されるとともに、多くの後進の育成にあたられ、シャウカステンにかけたフィルムの手書きレポートに始まり、トランスクリバースを活用したディクテーションを経て、フィルムレスの現代に至る“読影レポート”の変遷と進化を身をもって体験してられました。

本書を通じて、1人でも多くの放射線科医が、今後AIを含めた画像診断技術が進歩しても変わることのない“読影レポート”作成の神髄に触れていただければ幸いです。

そして間違っても「胆嚢炎疑い」という依頼に対して、漫然と「胆嚢炎疑い」という読影レポートを返すことのないように願っています。

国際医療福祉大学名誉学長

東京大学名誉教授

大友 邦

